七年間の動き

教員スタッフ

教員スタッフは学年進行とともに、徐々に拡充された。ポーランド語専攻では九二年四月に東京工業大学から関口時正助教授（ポーランド文化）が、翌九三年四月には大東文化大学から小原雅俊教授（ポーランドのユダヤ人の歴史と文化）が着任。チェコ語専攻では九三年四月に金指久美子助手（スラヴ語学）九八年四月講師昇任が採用され、文化史の着任した（九五年四月から一年間は併任）。

この結果、九五年四月の大講座制への移行後、ポーランド語専攻では三つの講座（言語・情報・総合文化）、地域（国際）に一名ずつ教官が配置されることになったが、チェコ語専攻は総合文化講座の専任教官を欠く状態が続いていた。さらに残念なことに、両専攻とも、現在のところ外国人教官の定員が認められていない。ネイティブ・スピーカーを含めた非常勤講師の存在はカリキュラムの充実化に不可欠であった。開設以後の七年間に出講した非常勤講師は次の通りである（順不同、敬称略）。

ポーランド語専攻

・鈴木エルジェータ

・石川クラジナ

・錦木輝一

・井内敏夫

・三井レナータ

・宮島直機

・泉博

・長谷見一雄

・白木太一

・柴理子

・久山宏一

・田口雅弘

チェコ語専攻

・飯島周

・ダグマル・アメモリオヴァー

・林忠行

・広瀬佳一

・千野亜矢子

・中島由美

・長興進

橋
## 七年間の動き

<table>
<thead>
<tr>
<th>年度</th>
<th>専攻</th>
<th>ポーランド語（男女内訳）</th>
<th>チェコ語（男女内訳）</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>1995 (平成7)年3月</td>
<td>6名（1：5）</td>
<td>8名（2：6）</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>1996 (平成8)年3月</td>
<td>10名（2：8）</td>
<td>14名（6：8）</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>1997 (平成9)年3月</td>
<td>14名（6：8）</td>
<td>13名（5：8）</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>1998 (平成10)年3月</td>
<td>19名（7：12）</td>
<td>15名（4：11）</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>合計</td>
<td>49名（16：33）</td>
<td>50名（17：33）</td>
<td></td>
</tr>
</tbody>
</table>

その他の

一九九五年三月、ポーランド語・チェコ語専攻の初めての卒業生を送り出した。以後、四年間卒業者の総数は両専攻合わせて九名。内訳は表の通りである。一般市民の対象にした公開講座を実施している。一九九三（平成五）年度は専任スタッフ全員によるリーレ式講義「ポーランド語とチェコの言語と文化」が、また一九九七年（平成九）年度には語学講座「ポーランド語初級」が行われ、どちらも熱心な受講者を得て好評であった。

一九九四年以降、ポーランド、チェコそれぞれの在日大使館が主催あるいは後援するスピーチコンテストが毎年行われ「ポーランド語は九六年を除く、本学の学生が積極的に参加している。学長表彰の栄誉に輝いた上位入賞者も少なくない。この七年間に学外の多くの方々から図書の寄贈があった。とりわけ別吉上昭三内
参考資料
・祭典のわき役さん ソウル五輪を支える④一九八八年七月六日付け朝日新聞朝刊
・千野栄一「チェコ語コース開設の念願かなう」一九九一年三月五日付け朝日新聞夕刊
・原卓也「客人を迎えいて」月刊「現代」講談社一九九二年四月号
・吉上昭三「ポーランド文学と加藤朝鳥」「ポロニカ」創刊号恒文社一九九六年八月